

『英国三兄弟の旅』におけるペルシャとキリスト教
国との同盟のゆくえ——シャーリー兄弟が見たサフ
アヴィー朝ペルシャ——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石橋, 敬太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25067

『英国三兄弟の旅』におけるペルシャと
キリスト教国との同盟のゆくえ
—— シャーリー兄弟が見たサファヴィー朝
ペルシャ ——

石 橋 敬 太 郎

序

1607年春、ジョージ・ウィルキンズ、ジョン・ディーおよびウィリアム・ロウリーの合作による『英国三兄弟の旅』はアン王妃一座によってカーテン座で上演され、大当たりをとった後、同年の終わりまでレッド・ブル座で上演された。本劇は同年の6月に書籍出版業組合に登録され、出版もされている（Wiggins V: 384）。主な資料は、アンソニー・ニクソンの『英国三兄弟』（*The Three English Brothers*）（1607年）とされている（Wiggins V: 383）。劇作家たちは、発行される前の本資料のマニュスクリプトを参考にしたか、ニクソンとの協力により執筆したと推測されている（Parr 7-8）。そして献呈の辞に示されているように、「シャーリー家の名誉ある寵臣および親友」（“Honour’s favourites, and the entire friends to the family of the Sherleys”）¹のために、彼らはシャーリー家の三兄弟の業績を簡潔に

¹ 以下、『英国三兄弟』からの引用ならびに行数表示は、Anthony Parr ed., *Three Renaissance travel plays* (Manchester and New York: Manchester University Press, 1995) に拠る。なお、パーは、この名誉ある人物をヘンリー王子と彼の支持者

要約しようという。劇中では1598年と1606年の間に生じたペルシャとトルコとの武力闘争を背景として (Wiggins V: 383), アッバース一世を体現するサファヴィー朝ペルシャ皇帝ソフィの求めに応じた次男アンソニーのロシアなどキリスト教ヨーロッパ諸国訪問の旅が描かれるほか、三男ロバートによるペルシャでのキリスト教会と教育施設の設定が舞台化される。また、キクラデス諸島のキア島においてトルコと戦い、味方の裏切りにより敵の捕虜となった長男トマスが大トルコ皇帝(歴史上のトルコ皇帝メフメト三世)からイスラーム教に改宗を迫られる場面を通して、トルコは周辺諸国を恐怖と混乱に陥れる、キリスト教ヨーロッパ諸国の完全「他者」としても示される。

ところで、歴史上のアンソニー・シャーリーは、1598年に彼のパトロンであったエセックス伯爵ロバート・デヴァルーの要求により、弟ロバートとともにペルシャにわたり、皇帝アッバース一世にキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟を申し出た²。アンソニーは、エセックス伯爵の従妹にあた

とみなしている(9)。

² ここで、本劇の舞台となった時期前後のシャーリー三兄弟——彼らは、サセックス州ウィストンの庶民院議員サー・トマス・シャーリーと彼の妻アン・ケンベの子として誕生した——の活動について簡単に紹介する。グローガンによると(151-55)、経済的に困窮し多くの借財を抱えていたシャーリー家において、アンソニーはエセックス伯爵の従妹にあたるフランシス・ヴァーノンと結婚した。この結婚はエリザベス女王の不興を買うこととなり、その汚名返上とばかりに、アンソニーはギニア湾におけるポルトガルの定住地を襲撃するために海外遠征に参加したが、成功を収めることはできず、ヴェニスに到着した頃には多額の借財を抱えてしまった。そうした兄のもとに弟のロバートが合流し、伯爵の求めにより1598年にペルシャへ向かった。兄弟は、アレppoから陸路アナトリアを通してペルシャに入り、皇帝アッバース一世に拝謁を許された。ペルシャに6カ月間滞在した後、アンソニーはキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟を求めるアッバースの外交使節として旅立ち、ロバートは人質のようにペルシャに残された。アンソニーはモスクワ大公国、ポーランドのクラクフ、プラハやローマなどを歴訪したが、期待された成果を上げることはできなかった。その数年後に、ロバートも妻テレジアとともにペルシャの外交使節としてキリスト教ヨーロッパ諸国を歴訪したが、その目的は通商条約の締結であったといわれている。

るフランシス・ヴァーノンと結婚し、この結婚が彼と伯爵とを結びつけた (Grogan 151)。このとき、エセックスは、ヨーロッパを席卷していたトルコ勢力を抑えるために、あるいはまたペルシャとの商業上の結びつきを推進するために、同国との同盟を考えていたといわれている (Grogan 152)。アッバースにしても、トルコとの戦いを有利に進めるとともに、シルク貿易の拡大によるペルシャ経済の再建のため、神聖ローマ帝国やスペインなどキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟をもくろんでおり、アンソニーの申し出は歓迎すべきものであった (Grogan 153-54)。当時、ペルシャ産のシルクは、トルコの仲買人を通して、ヨーロッパの市場に輸出されており、直接ヨーロッパの商人と取引ができるのなら、さらに利益を増大させることができると、アッバースは期待した。従って、これまで実現されることのなかったペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国との徹底的な外交上の接触を開示したシャーリー兄弟の功績は、イングランド人の関心を刺激したかもしれない (Chew 504)。劇中で描出されるアンソニーのロシア皇帝やローマ教皇などとの謁見は、このあたりの事情を史実に沿って再現されている。

しかし、キリスト教ヨーロッパ諸国とペルシャとの同盟を描く劇作家たちの試みは、イングランド政府にとって理解困難なものであったであろう。というのは、ペルシャ皇帝アッバース一世（あるいはエセックス伯爵）によってシャーリー兄弟に与えられたミッションは、イングランドの外交政策に反するものであったからである。すなわち、当時のイングランド政府は、対スペイン外交上、トルコとの同盟を継続していた。ペルシャとの直

長男トマスは、地中海で私掠船活動に従事していた。そのとき、トルコに拿捕され、コンスタンチノーブルに捕囚されたものの、1607年にイングランド国王ジェイムズ一世の書簡によって釈放された。トマスは本国に帰国するも、レヴァント会社の活動妨害や二重スパイの容疑でロンドン塔に投獄される憂き目を見ている。

接貿易については、ロシア経由のカスピ海ルートの再開を意味していたことから、ロシア皇帝の承認が必要であり、商人たちにとってはクリミア系のタタール人による略奪など危険にも満ちていた (Blow 53)。1578 年に生じたトルコとペルシャとの戦いも影響したのであろう。1581 年のジョン・ニューベリーのパルシャ訪問を最後に、イングランドとペルシャとの関係は途絶えてしまう。さらに、ペルシャとの直接貿易は、イングランドの貿易拠点レヴァント会社の収益にも影響を与えることが懸念された。レヴァント会社は、ペルシャやアレppoのトルコ人商人からインドなどの東方商品を輸入していたのである (Blow 53)。そうしたなか、シャーリー家の三兄弟がキリスト教に寛大なソフィなどサファヴィー朝ペルシャに関する新しい情報をもたらしたことは繰り返すまでもない。

事実、リンダ・マクジャネット (Linda McJannet) によると、1527 年から 1660 年の間に登場した演劇、宮廷仮面劇や市長の就任披露行列のなかで、ペルシャを扱った作品として本劇のほか、クリストファー・マーロウの『タンバレイン大王』第一部・第二部 (1587-88) やトマス・ヘイウッドの『ロンドンの四人の奉公人』(1600) など数えるしかない (236-67)。本劇の目的について、ジェイン・グローガン (Jane Grogan) は、これら三兄弟のアクションはイングランドとペルシャおよび地中海世界との接触に対する姿勢に光を当てているという (158)。確かに、ロバート・グリーン『トルコ皇帝セリム』(1591) などトルコを信用に値しないパートナーとして描出する前世紀末の演劇作品の主題を踏まえて、本劇にはペルシャを友好国とみなす新しい見解が導入されている。グローガンが指摘する通り、本劇の見どころは、実在するシャーリー兄弟によるイスラーム教ペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国との外交交渉であり、また対トルコ政策としての第三勢力ペルシャの位置づけであったであろう。アンソニー・パー

(Anthony Parr) は、劇中にペルシャとの友好を求める外交上の交渉と並んで、イングランドとカトリックおよび非ヨーロッパ諸国との文化的な接触を見て取っている (6)。

確かにそうなのだが、ペルシャとの同盟を求めるアンソニーのヨーロッパ諸国訪問が大きく国際情勢を展開することはない。ロシア皇帝たちから名誉を与えられるものの、その功績は個人のレベルにとどまっている。ペルシャでキリスト教信仰を認められたロバートですら、カトリックに改宗もしている。味方に裏切られ、トルコ人の捕虜となった長男のトマスは、イングランド国王の介入により釈放される。トマスの釈放は、トルコとイングランドとの同盟の結果とも考えられる。こうしたペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国との現状を英国三兄弟の冒険を通して照射することが劇作家たちの目的であったのではなかろうか。以下においては、本劇を執筆された当時の文脈に位置づけて、侵略と拡大を続けるトルコの脅威を前にしたペルシャの現状と、同国とキリスト教ヨーロッパ諸国との実際を明らかにする試みである。

I

舞台上にシャーリー三兄弟が登場し、次男アンソニーと三男ロバートが父とともにイングランドに残る長男トマスと別れ、ペルシャに出発する様子が示される。その後で、観客が見るものは、トルコに勝利を収め、意気揚々と行軍するペルシャの皇帝ソフィ軍である。史実では、この時期にペルシャはトルコと戦っていない。ソフィとして登場する皇帝アッバース一世が戦ったのは、ペルシャ北西部の国境地域を脅かすウズベク人であった (Dale 93; Brotton 238)。この歴史の書き換えは、果てしなく拡張を続ける

トルコに対抗できる第三勢力としてのペルシャという構図を観客に強く印象づけるためのものであったろう。事実、この戦いの勝利により、ヘラート、ニシャプールやマシュハドなど主要都市を奪還したペルシャは、トルコとの戦いを可能にした。そして、劇作家たちは、アンソニーとソフィとの謁見の場面を用意して、イスラーム教ペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟関係に踏み込む。その手始めに、彼らは、初めて目にするイングランド人アンソニーの姿に「このキリスト教徒は、この世の者とは思えない」(“Methinks this Christian’s more than mortal”) (Scene i, 75) とソフィに語らせ、彼を天上からの使者と思わせる。またサファヴィー朝の都ガズヴィーンの長官によると、ソフィはアンソニーたちを熱烈に歓迎している。歓迎の挨拶のなかで、ソフィはペルシャ人の戦いを実演する。その実演では、捕らえたトルコ人の首を切り落として、それを槍の先に据えたペルシャ人が行進する。ペルシャ人の戦いの残酷な慣習に対して、アンソニーとロバートは、捕虜に慈悲をかけ、捕囚として生きながらえることを許すというキリスト教徒の戦争の在り方を示し、ソフィを感嘆させる。

このとき、ソフィは、モータス・アリーに次いでアンソニーを称賛する。モータス・アリーとは、預言者ムハンマドの義理の息子を指し、シーア派のイスラームの支持者によって彼の真の後継者とみなされていた人物である (Parr 64. n.)。ソフィの言葉から、同じイスラーム教徒でありながら、ペルシャ人はシーア派であり、トルコ人はスンニ派であることも明らかにされる³。両国人の宗派の相違と並んで注目に値するのは、ソフィがアンソ

³ シーア派とスンニ派のちがいは、おおよそ次のようになる。両者とも、アッラーの使徒であり、イスラームの開祖ムハンマドのいとこで娘婿のアリーとその子孫を、自分たちの指導者と考える。シーア派では、その指導者はイマームと呼ばれ、スンニ派ではカリフと呼ばれる。イマーム、カリフともムハンマドの後継者であるのだが、ムハンマドのどの部分を受け継いだかという認識が異なる。つまり、ムハンマドは、アッラーと交信しうる預言者であるとともに、現実世

ニーたちのキリスト教的な博愛を天の声を模していると述べたことである。彼はキリスト教信仰を敵視していない。アンソニーがエリザベス女王の美德と権勢を誇らしげにソフィに紹介したことも見逃せない。これによって、ペルシャをイングランドに組み入れようとするアンソニーの思惑が垣間見える。そして、キリスト教ヨーロッパ諸国の主権を守るため、戦場での働きを求めてペルシャを訪れたと説明したとき、ソフィから「私たちペルシャ人とお前たちのちがいは何か」(“what’s the difference ’twixt us and you?”) (Scene i, 162) と問われて、すかさず「至上の神が異なることを除けば、何のちがひもございません」(“None but the greatest”) (同 163) と、アンソニーは答える。唯一異なるのは、それぞれの「宗教上のしきたり」(“inward offices”) (同 174) にすぎないとして、彼は次のように続ける。

We live and die, suffer calamities,
Are underlings to sickness, fire, famine, sword.
We all are punished by the same hand and rod,
Our sins are all alike; why not our God? (Scene i, 177-80)

アンソニーにとって、キリスト教徒とイスラーム教徒の一生の営みに変わることはなく、同じ神の手と鞭によって罰せられる以上、両者の神には大きなちがいはない。これにソフィがどのように反応するかが本劇の見どころ

界に存在するウンマ（イスラーム教徒の共同体）の指導者でもあった。従って、ウンマの指導者は、共同体の政治的指導者であると同時に、礼拝の導師を務める宗教的指導者でもあった。スンニ派では、アッラーと交信できるのはムハンマドが最後であると考えて、カリフはウンマの指導者としての側面を受け継いだとした。これに対して、シーア派は、預言者の系譜はムハンマドで終わったとしても、アッラーと交信する能力をもつ人は途絶えていないとして、イマームにその能力を認めている。カリフの継承は選挙によって行われる。イマーム位の継承は先代イマームの指名による。実際には、いずれの場合も、世襲されることが多かった。詳細は、東長靖『イスラームのとらえ方』（山川出版社、1996年）、63-75頁を参照。

ろの一つとなるのだが、ここに使者が登場し、トルコ人が反撃の用意をしているとの報告をしたため、ソフィとアンソニーとの会話はさえぎられてしまう。ただし、皇帝がアンソニーに改めて歓迎の意を表して、「お前のために、すべてのキリスト教徒を愛する」(“For thy sake do I love all Christians”) (Scene i, 190) と述べたことから、おそらく彼は「信仰する神が異なることを除けば、人間にはちがいはない」とするアンソニーの説明を受け入れたものと考えられる。そしてそのことは、ペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国の同盟というアンソニーの申し出につながっていく。

II

続く場面において、ほぼ史実に即してトルコ軍に圧倒されるペルシャ軍が示される。この戦いではソフィが敵に捕らえられるが、アンソニーによって救済される。そして、アンソニーは、トルコとの戦いを有利に進められるように、ソフィにキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟を訴える。彼はまた、ソフィに「キリスト教国と手をお組みになりますれば、皇帝は最も高い地位に就く将軍となられ、この戦いでは天使たちがあなた様をお護りし、あなた様のために戦うことになりましょう」(“To join with them, great emperor, you shall be / A captain for the highest, and in your war / Have angels’ hands to guard and fight for you”) (Scene ii. 168-70) という。教会ですらひざまずき、ソフィのために祈り続けると、彼はたたみかける。これほどまでに、アンソニーにペルシャ人に対するキリスト教徒の信頼を確信させたものは、グローガンが指摘したように、当初、ローマ教皇や神聖ローマ帝国などの君主たちがトルコの勢力拡大を阻止する目的でペルシャに同盟を求めていた事実であった(153-54)。天上の神のため、あるいは正義のた

『英国三兄弟の旅』におけるペルシャとキリスト教国との同盟のゆくえ

めに戦うキリスト教徒について、アンソニーは次のように説明する。

Then Christian princes join their hands with yours
And sweep their several nations to a heap
With one desire to number out their men,
Knowing who fight for heaven each soldier's ten,
And every hand is free in shedding blood
Since 'tis to wash the evil from the good. (Scene ii, 181-86)

引用中の「天上の神」との戦いは、まさに「善から悪を洗い流す」聖戦を意味する。トルコとの戦いに勝利することは、ソフィの名に名誉、彼の魂に至福をもたらすことにもなる。もちろん、皇帝の寵愛を受けたシャーリー兄弟に恨みを抱くペルシャの高官ハリベック（実在したクズルバシュの有力者フサイン・アリー・ベグ・バヤード）と彼の兄弟カリマスにとって、キリスト教徒との同盟は不名誉以外の何物でもない。

互いの神の優劣をめぐるハリベックとアンソニーとの口論が続くなかで、ソフィは再びキリスト教ヨーロッパ諸国との同盟の目的をイングランド人に問う。ソフィからの問いかけに対して、アンソニーは「キリスト教国と国境に接しております近隣諸国の王侯たちはみな、トルコに対抗するため皇帝陛下からの全面的な援助を切に願っているのです」(“Christendom / And all the neighbour princes bordering here, / And crave their general aid against the Turk, / Whose grants no doubt of”) (Scene ii. 241-44) と答える。トルコの勢力拡大を阻止し、キリスト教国の主権を守るには、ペルシャとの同盟は、宗教の相違を超えて締結されなければならない。そのことは、イングランドの親トルコ外交政策を破綻させる目的でエセックス伯爵が1598年にアンソニーをペルシャに送った事情を裏づける (Wilson 209-

26)。すなわち、拡大を続けるトルコとキリスト教ヨーロッパ諸国との対立のなかで、トルコに対抗できる第三の勢力として、ペルシャは同時代の国際社会において、にわかに政治性を帯びてきたのである。

このような政治的文脈を意識してか、劇中ではソフィがアンソニーの言葉を称賛し、彼をペルシャ皇帝の大使としてヨーロッパ諸国に派遣する場面が用意される。シャーリー家の三男ロバートは人質としてペルシャに残る。このロバートは、トルコとペルシャとの戦いでの功績により名声を得たほか、皇帝の姪から思いを寄せられる⁴。彼女は、ハリベックから好意をもたれているのだが、異教徒であり、身分も異なるイングランド人に強く心を惹かれる。劇の後半では、ペルシャの慣習に背いて、兄トマスの命と引き換えに、敵の捕虜を釈放したことがもとで、ソフィの手にかかってロバートが処刑されたものと思い込み、偽の首にすがって嘆き悲しむ姪の様子が示される。「これまで彼を愛したことはなかったわ。しかし今、遠い太陽にかけて、彼を心から愛しています」(“Till now I never loved him,/ And now by yonder sun I dote on him”) (Scene xi, 217-18) と訴える彼女の愛は、宗教や身分の相違を超えて、皇帝ですら引き離すことができない。姪の思いを知ったソフィは事実を告げ、彼女とロバートとの結婚を認める。彼らの結婚により、イングランドとペルシャとが結びつけられる。こうしたキリスト教徒に寛大なペルシャ人を描出し続けることによって、劇作家たちは、トルコとキリスト教ヨーロッパ諸国との対立という緊張をはらんだ国際情勢のなかでペルシャを同胞とみなすことの妥当性をイングランド

⁴ 1608年にロバートは、カルメル会修道士によってシルカシア地方の首領の娘テレジアと結婚した。彼女の叔母は、キリスト教徒であり、アッパーズ一世が寵愛する妻の一人であった。この叔母により、テレジアはサファヴィー朝の宮廷で育てられた (Blow 88)。1625年にイングランド国王ジェームズ一世を訪れた際、ロバートがテレジアをアッパーズの姪と偽り、皇帝一族との婚姻関係を吹聴しているとして、ペルシャの外交使節に殴打された事件も生じている。

の観客に訴えるのである。

III

ペルシャ皇帝の大使として、アンソニーはキリスト教ヨーロッパ諸国を歴訪する。これらの訪問先での見どころは、やはりペルシャとの同盟を求めるアンソニーの外交交渉とその結果であろう。ところが、この旅では、皇帝の寵愛を受けたアンソニーを快く思わないハリベックたちが同行した国々で彼に対する妨害を繰り返す。歴史では、ハリベックに随行した二人のポルトガル人のアウグスティヌス会修道士がアンソニーを苦しめた(Blow 61)。劇中では、ローマとヴェニスを訪れる前のポーランドのクラクフ、ドイツ各地やプラハ訪問が省略されている。その理由については後述することとして、最初の訪問地ロシアにおいてハリベックが皇帝ボリス・ゴドゥノフの前でアンソニーの低い身分の生まれや卑しい振る舞いを告げる。これを耳にしたロシア皇帝は、アンソニーを冷遇するのみならず、キリスト教徒のスパイか盗賊として投獄する。史実と同様に、イングランド人商人の報告により、アンソニーは釈放され、皇帝から恩寵も与えられる。ここで見逃せないのは、対トルコ外交をめぐるペルシャとロシアとの交渉結果が明示されないことである。あくまでも、ソフィの大使として、アンソニーがロシア皇帝に謁見したことにとどまっている。同じことは、ローマでも繰り返される。教皇クレメンス八世と枢機卿の前でアンソニーは、彼らを母教会の父と呼び、人間の救済の階段および私たちを拘束するか、解放する鍵と述べて、次のように続ける。

That Christian princes would lend level strength

To curb the insulting pride of paganism;
And you, the mouth of heaven, advertise them
To join their bodies to an able arm,
That, as above's stern vengeance for heaven's foes,
So men, heaven's friends, should seek their overthrows. (Scene v, 44-49)

パーによると、アンソニーは、この訪問の前にカトリックに改宗し、ローマ教皇を支持することができた(10)。キリスト教国とトルコとの戦いは再び聖戦にたとえられる。ただし、カトリックを世界教会として位置づける神学的な根拠は示されない。劇中において悪意に満ちた歴史上のアウグスティヌス会修道士が削除されたことからするなら、アンソニーの言葉には異教徒との同盟を確立するうえで宗派を超えたキリスト教が表されていると考えられる。こうして、劇作家たちは、教皇がアンソニーを魂の喜びと呼び、ハリベックを非難する場面を作り出す。このとき、アンソニーは、いきなり教皇の前でハリベックを打ちのめす。このことを教皇にとがめられた彼は、ロシアでハリベックに中傷され、投獄されたことを思い出し、復讐を遂げたのだと釈明する。事実を知った教皇は、トルコに対抗するためにキリスト教ヨーロッパ諸国を一つにしようとする彼に名誉を与えたほか、ペルシャとの同盟のための相談を約束するが、アンソニーをヴェニスへ送り出してしまう。

しかし、ペルシャとの同盟を求めるアンソニーのヴェニス訪問も外交上大きく展開することはない。それどころか、旅の途中で、彼は偶然イングランドの道化ケンプと出会う。事実、この二人は1601年の夏にヴェニスで会っている。彼らの出会いは、劇の展開にリアリティを与えたであろう。ハーレクインと彼の妻も登場し、ケンプと知恵比べを披瀝して、場面に光彩を添える(Chambers 286-87)。それにしても、要領を得ないアンソニー

のキリスト教ヨーロッパ諸国訪問に加えて、彼がヴェニスで強欲なユダヤ人高利貸しザリフの罠にかかり莫大な借金をしたうえに、ハリベックたちの裏工作によって窮地に陥るアクションの展開は、どのように考えたらよいのであろうか。確かに、ヨーロッパ各地で借金を重ねるとともに、同行したペルシャの高官と対立を続けたアンソニーの旅は、ほぼ史実に沿って再現されている (Grogan 156)。そこで、当時のキリスト教国の君主たちに彼らのミッションがどのように映っていたのかを振り返ってみたい。

繰り返しになるが、ローマとヴェニス訪問の前に、歴史上のアッパース一世の使節団はドイツ各地とプラハを訪問した。これらの皇帝たちは、イングランド人のアンソニーがアッパースを信用して、トルコに対抗するための同盟を勧誘していることに当惑していた (Blow 62)。というのは、彼らはエリザベス女王政府が親トルコ外交を支持していることを知っていたからである。むしろ、この同盟によって、イングランドがペルシャとアジア貿易をコントロールするために、ロシア経由の貿易を再開させるか、アッパースと協力して海上貿易の航路であるペルシャ湾からスペイン人やポルトガル人を追い払おうとしていると疑われた (Blow 62)。しかも、ハンガリーでトルコと戦っていた神聖ローマ皇帝ルドルフ二世は、先のアッパースとの取り決めに反して、本劇が執筆された 1606 年にトルコとの和平を締結した (Blow 85)。レヴァントでの商業上の利益を守るためにトルコとの友好関係の継続を望んでいたヴェニスの元老院は、皇帝の使節団に会うことさえ拒否している (Blow 62)。最終的に、上席をめぐって対立を続ける使節団は袂を分かち、アンソニーはヴェニスやスペインを訪れ、ハリベックはリスボンからペルシャに戻った (Blow 63-64)。結果として、アンソニーたちのキリスト教ヨーロッパ諸国歴訪は必ずしも成功したとはいえなかった。こうした現実が劇中のアクションの展開に反映されていると考え

『英国三兄弟の旅』におけるペルシャとキリスト教国との同盟のゆくえ

られるのである。

IV

アンソニーのキリスト教ヨーロッパ諸国歴訪とほぼ同じ頃、長男トマスはトルコ領のキクラデス諸島のキア島で住民に降伏を迫るが、味方の裏切りにより敵の捕虜となり、コンスタンチノーブルに連れ去らされてしまう。トルコとの戦いに勝利を取めた三男ロバートは、そのことをトルコの衣服をまとったキリスト教徒から知らされる。とどまることを知らないトルコの帝国拡大の野望と傲慢さは、大トルコが自らを「地上の唯一の神、王のなかの王、楽園の統括者」(“the sole god of earth, / King of all kings, provost of Paradise”) (Scene viii, 17-18) にたとえ、残忍な拷問によってトマスにイスラーム教への改宗を迫ることで示される。この場面では、暴力と恐怖による支配こそがトルコの真の姿として描出されている。ちょうどそのとき、イングランドのエージェントが、釈放を求めるイングランド国王の親書を大トルコに手渡し、トマスは故国に帰ることが許される。これはトルコとイングランドとの同盟の結果でもあろう (Parr 15-16)。そしてロバートは、ソフィの許可もなく、トマスと引き換えにトルコ人捕虜を釈放する。前に述べたように、このことがソフィの憤りを招くのだが、かえって彼の姪のロバートに対する愛を確信させてしまう。そればかりか、トマスの釈放を拒否した大トルコに向かって、ソフィは戦いを決意する。ソフィの決意から、ペルシャを友好国として訴えようとする劇作家たちの思いが伝わってくる。

さらに重要なことは、ロバートがハリベックのロシアやローマでの悪意を暴露し、アンソニーの無実を証明して、ペルシャ皇帝の信頼を確実にし

たことである。事実を重く見たソフィは、ハリベックに処刑を宣告する。ペルシャは、すでにササン朝などの古の豊かで快樂に満ちた国ではなく、政治的な威厳と名誉を重んじる近代的な国に変貌している。キリスト教ヨーロッパ諸国との真の友好と同盟を確立するには、ハリベックやカリマスのような宮廷人は舞台から消え去らなければならない。続いて、ソフィはロバートと姪の間に生まれた子どもにキリスト教の洗礼を受けることを認め、自身が名付け親になるという。ここには、徹底的にイスラーム教に改宗を迫る大トルコとは異なり、再びキリスト教徒に寛大なソフィの宗教観が示されている。彼はまた、キリスト教会や施設の建設を求めるロバートの願いも認める。そして、舞台は洗礼を前にしたソフィの次の言葉でクライマックスを迎える。

In the best embrace of our endeared love
We do enclose thee. Sherley shall approve
Our favours are no cowards, to give back;
They shall abide till death. Thou shalt not lack
Our love's plenitude, our dearest nephew.
Now for the temple, where our royal hand
Shall make thy child first Christian in our land. (Scene xiii, 196-202)

ソフィがロバートを抱擁したことは、それこそ将来のペルシャとイングランドとの友好が成就されることを暗示する。同じイスラーム国でありながら、キリスト教に対するペルシャとトルコとの宗教上の相違も明らかにされる。ソフィは、シャーリー家の名にちなんだ新たな教会において、ロバートの子どものを彼の手でこの国で最初のキリスト教徒にしようともいう。この台詞の後すぐに行われる洗礼の儀式は、ロバートの功績を高らかに言祝ぐ。歴史では、彼はアッバース一世をキリスト教徒に改宗させる願いを抱

いていたといわれている（Harrison V: 32）。ただし、彼を含むシャーリー家の兄弟の宗派がカトリックであったことは忘れてはならない。教皇を頂点とするキリスト教ヨーロッパ諸国と交渉するには、宗派を転換することでも必要であったのであろう。だからといって、当時のイングランド人にとって、このことは容易に受け入れられる問題ではなかったはずである。

大団円となるエピローグでは、擬人化された「名声」が登場し、シャーリー三兄弟の現状を示す。ロバートはペルシャの高官、アンソニーはスペイン国王、そしてトマスはイングランドにいる父とともに舞台に現れる。「名声」は、それぞれに魔法の望遠鏡を与える。彼らは互いを見て、抱き合うように申し出た後で、幕がおりる。だが、要領を得ないアンソニーのキリスト教ヨーロッパ諸国歴訪、ペルシャにカトリック教を認められたロバートや、大トルコによってイスラーム教に改宗を迫られたステレオタイプなトマスのキア島での苦境を目の当たりにした後で、どれだけの観客がペルシャを信頼のできるパートナーとみなすことができたであろうか。しかも、依然として1605年に生じた火薬爆破陰謀事件の首謀者がスペインであるとのうわさが残るなか、同国に滞在するアンソニーが国王によってサンティアゴ勲章を授与される場面が舞台化される。確かに、暴力と恐怖を通してヨーロッパを席卷し続けるトルコを前にして、キリスト教に寛大であり、キリスト教ヨーロッパ諸国との同盟を求めるペルシャの外交姿勢は、新しい情報として歓迎されたかもしれない。

そうだとしても、シャーリー兄弟が当時のイングランドの宮廷人や商人たちから奇異に映っていたことは事実である。長男トマスは、イングランドに帰国後、レヴァント会社に対する妨害活動や二重スパイの容疑で、一時期ロンドン塔に幽閉された。アンソニーにしても、海上貿易の拠点ホルムズ海峡をめぐるペルシャとスペインとの関係改善に苦慮していた

(Blow 88-91)⁵。アッバース一世は、スペイン国王フェリペ三世にトルコ攻撃を駆り立てていたのだが、容易に行動に移さない彼に苛立ちを覚えていたのである。本劇が上演された後も、キリスト教ヨーロッパ諸国とペルシャとの関係構築が推進されたという記録はない。劇中で描出された出来事の数年後の1608年、歴史上のロバートは、妻テレジアとともにアッバース一世の使節として、キリスト教ヨーロッパ諸国を歴訪し、ペルシャとの同盟構築を説いてまわった(Harrison V: 154-55; 165-66)。それでも、彼らに疑いの目を向けるレヴァント会社の商人たちにとって、ロバートはトルコとの貿易を脅かす存在でしかなかった(Blow 94)。後日談にはなるが、本劇が初演された時期のシャーリー三兄弟に対するイングランド人の認識はそのようなものであったのではなかろうか。これら三兄弟の異国の旅を通して、同じイスラーム国でありながら、トルコとは異なる第三勢力としてのペルシャを取り巻くキリスト教ヨーロッパ諸国の現状を紹介するのが劇作家たちの目的であったと考えられるのである。

謝辞

本研究は、令和4年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））（課題番号：21K00359）の成果の一部である。

⁵ 最終的に1622年、ロバートの軍事的な指導もあって、アッバース一世は、イングランドの支援を得て、ペルシャ湾のホルムズからポルトガル人を追い出し、イングランド東インド会社とオランダ東インド会社との商業的結びつきを拡大した。

References

- Blow, David. *Shah Abbas: The Ruthless King Who Became an Iranian Legend*. London and New York: I.B. Tauris, 2009, repr. 2014.
- Brotton, Jerry. *The Sultan and the Queen: The Untold Story of Elizabeth and Islam*. New York: Viking, 2016.
- Chambers, E.K. *The Elizabethan Stage*. Vol. III. Oxford: Clarendon Press, 2009.
- Chew, Samuel C. *The Crescent and the Rose: Islam and England during the Renaissance*. New York: Oxford University Press, 1937.
- Dale, Stephen F. *The Muslim Empires of the Ottomans, Safavids, and Mughals*. New York: Cambridge University Press, 2010.
- Grogan, Jane. *The Persian Empire in English Renaissance Writing, 1549-1622*. Houndmills: Palgrave Macmillan, 2014.
- Harrison, G.B. *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*. Vol. V. London and New York: Routledge, 1958, repr. 1999.
- McJannet, Linda, "Bringing in a Persian," *Medieval and Renaissance Drama in England* 12 (1999): 236-67.
- Parr Anthony, ed. *Three Renaissance travel plays*. Manchester and New York: Manchester University Press, 1995.
- Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. V. Oxford: Oxford University Press, 2015.
- Wilson, Richard. "'When Golden Time Convents': *Twelfth Night* and Shakespeare's Eastern Promise." *Shakespeare* 6: 2 (2010): 209-26.

東長靖 『イスラームのとらえ方』。山川出版社, 1996 年。

On a Political Alliance between Persia and
Christian States in Europe in *The Travels*
of the Three English Brothers

—— Safavid's Persia Seen by the Sherley's Brothers ——

Keitaro Ishibashi

The Travels of the Three English Brothers was written by John Day, William Rowley and George Wilkins and performed in 1607. The play follows the fortunes of the Sherley's three brothers over several years, telescoping them into contemporaneity: the progress of Anthony on Sophy's (the Sultan of Persia, Abbas I's) embassy to conclude an alliance against the Ottoman empire in Europe; the success in love and war of Robert in Persia, culminating in winning the Sophy's niece for himself; and the trials and tribulations of Thomas. The play includes propagandistic elements to promote a political alliance between England and Persia. It has been pointed out that the play introduces contemporary Persia to the English through the travels of the brothers. More importantly, Jane Grogan argues that the play focuses not only on the Sherley's Persian enterprises, but also on an England's attitude to contemporary Persia.

Despite relating events pertaining to contemporary Persia, however, the brothers' travels are shown in episodic mode. For example, the travels of Anthony's embassy to conclude a defensive alliance against the Ottoman empire in Europe are vaguely shown: the Pope and the Emperor of Russia will not re-

spond to his proposal; the States of Venice only welcome his visit. Sherley's unsuccessful embassy means a contemporary situation between Persia and Catholic states in Europe. Whatever the play's propagandistic intent, it shows to the English audience the complicated international situation around the Mediterranean world. This paper will illuminate the international situation by examining the diplomatic elements of the play in relation to contemporary events around the Mediterranean world.